

都道府県別賞一等

突然のできごと

静岡県 静岡市立清水第五中学校 三学年

水野 由袈

秋の体育祭が終わって、急に寒くなったある日。夕方、部活から帰ると、家中の空気がいつもと違っていた。お母さんは黙ったまま夕食の準備をされていて、お父さんは電話をしながら深刻な顔をしていた。私は何かが起きたことをすぐに感じた。

「おばあちゃんが急に倒れて亡くなったの。」お母さんの声は震えていた。私は言葉が出なかった。おばあちゃんは、認知症のおじいちゃんをずっと介護していた。毎日忙しそうだったけれど、私たちのこともいつも気にかけてくれた。そんなおばあちゃんが、突然いなくなってしまったなんて、信じられなかった。

小さい頃、おばあちゃんと妹と一緒にお店屋さんごっこをしたことを、今でもよく覚えている。おばあちゃんはお客さん役で、私が粘土で作ったアイスを渡すと、

「上手に作ったねえ。」

と、ほほ笑みながら、遊んでくれた。その笑顔が、今でも頭に浮かぶ。

おばあちゃんが亡くなってから、家の中の雰囲気は一気に変わった。お母さんもお父さんも、認知症のおじいちゃんの世話で毎日忙しくて、会話も少なくなった。ちょっとしたことでピリピリしていて、家にいるのがつらく感じることもあった。そんなとき、おじいちゃんが介護施設で暮らすことになった。おばあちゃんが生命保険に入っていて、そのお金のおかげで入ることができたらしい。お父さんとお母さんは少しずつ落ち着きを取り戻し、家の中の空気も前のように穏やかになっていった。施設に入ったおじいちゃんに、家族で会いに行った。私は少し緊張していたけれど、おじいちゃんはいつもと同じ感じで、「ここは静かでいいところだよ。」

と言った。案外、居心地が良さそうで、少し安心した。

おばあちゃんが残してくれた保険のお金は、ただの「お金」じゃなかった。それは、家族を守るための「思いやり」だったんだと思う。おばあちゃんは、自分がいなくなった後のことまで考えてくれていた。その優しさに、私は、胸がいっぱいになった。

人生は、いつ何が起こるかわからない。突然の別れや、思いがけない出来事は、誰にでも起こる。だからこそ、備えておくことはとても大事だと思う。

第63回中学生作文コンクール

私も、将来大人になったら、家族のために何かできるように準備しておきたい。
おばあちゃんの思いは、これからも私の中で生き続ける。そして、私も誰かの
支えになれるような人でありたい。